慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『百科全書』項目 «HONNÊTE» にみるサン=ランベールの政治道徳思想
Sub Title	La pensée politique et morale de Saint-Lambert dans l'article «HONNÊTE» de l'Encyclopédie
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.2 (2021. 12) ,p.47- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	荻野安奈教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210002-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『百科全書』項目 « HONNÊTE » にみる サン = ランベールの政治道徳思想

井上　櫻子

今日のフランス文学史において、ジャン = フランソワ・ド・サン = ランベール（Jean-François de Saint-Lambert, 1716-1813）の功績は、季節の変遷とともに移ろう自然の姿とそこに生きる人間のさまざまな感情を歌った『四季 *Les Saisons*』（初版1769年）をもって、描写詩という18世紀特有のジャンルを確立したことにあると紹介されるのが一般的である。しかし同時に彼は『百科全書』に政治・経済関連の項目（例、「立法者 « LÉGISLATEUR »」（t. IX, pp. 357a-363a）、「奢侈 « LUXE »」（t. IX, pp. 763b-771a））や道徳関連項目（例、「親しさ « FAMILIRATÉ»」（t. VI, pp. 390a-b）、「名誉 « HONNEUR »」（t. VIII, pp. 288a-290b））を中心に、少なくとも27の項目を匿名[1]で執筆し、興味深い人間論を展開している。

本論考では、『百科全書』第8巻に収録された項目「礼儀をわきまえた、立派な、尊敬すべき « HONNÊTE »」（pp. 286b-287b）を取り上げ、そこに垣間見られる執筆者サン = ランベールの思想家としての意志を確認したい。

I. 項目「オネット « HONNÊTE »」：社会的有用性の強調

ルイ14世の時代のフランスの社交界において、豊かな教養を有しつつも衒学に走ることなく、礼節を重んじながら繊細な感性をもって良好な人間関係を築こうとする「オネットム « honnête homme »」が、理想の人間像を包括的に象徴する概念として尊ばれていたことはよく知られている[2]。先に、「礼儀をわきまえた、立派な、尊敬すべき」と訳してみたものの、現代フランス語では、「正直な」あるいは「誠実な」という意味を第一義とする「オネット « honnête »」という語

が、17世紀、18世紀フランスにおいて持ったニュアンスを一言でまとめるのは難しい（したがって本論考でも以下、「オネット」と記すこととする）。この「オネット」という語について、サン＝ランベールは項目冒頭で次のように定義する。

> 全体の秩序を守っていることを証明する行動、感情、発言に対して、また、美徳と真の名誉の法に反するようないかなることも行わない人々に対してこのような名［＝「オネット」という語］が与えられる。
> （中略）
> 「オネット」とは、地位のある人において人々が称賛する美徳であり、市民の道徳における主要な美徳である。それは穏やかな美徳、社会的美徳を育み、良き品行、愛すべき資質を生む。人々に崇拝されるような偉人の性格ではないものの、尊敬され、愛され、求められる人物の性格である。このような人物は、自らの行いによって尊敬の念を集め、そしてそうした行いを真似たいという欲望を掻き立てることによって、正義感、礼節、繊細さ、慎み、そして良き品行に対する好みと感覚を国民の間に保つのである（t. VIII, p. 286b）。

『百科全書』に先行する辞典に示された「オネット」の定義と比較すると[3]、サン＝ランベールの定義に特徴的な点は、「オネット」という資質について、道徳的観点からだけでなく社会的観点から検討していることにあると言える。例えば、1721年刊行の『トレヴー辞典』では、「オネット」とはまず「尊敬と称賛に値するもの、理にかなっており、良き品行の観点から名誉と美徳にかなうもの」[4]と定義されているし、1740年版『アカデミー・フランセーズの辞典』においてもこの語の第一義は「有徳であること、名誉と徳にかなっていること」[5]であるとされる。これに対して、『百科全書』の項目では、「全体の秩序を守っていることを証明する行動、感情、発言 « [les] actions, [les] sentiments, [les] discours qui prouvent le respect de l'ordre général »」、「徳と真の名誉の法 « [les] lois de la vertu et du véritable honneur »」、「市民の道徳 « la morale des citoyens »」、「社会的美徳 « [les] vertus sociales »」などといった表現から、サン＝ランベールは「オネット」という資質の社会的有用性に光を当てようとしていることが確認される。

サン＝ランベールの議論の独自性は、同じく『百科全書』に掲載された項目

「オネットテ « HONNÊTETÉ »」（t. VIII, pp. 287b-288a）との比較によって、より明確になるだろう。というのも、「オネット」の直後に置かれたこの項目で、ジョクールは、より伝統的な定義を展開しているからである[6]。ここではまず、「オネットテ」という語は「品行、態度、言葉遣いにおける洗練」（t. VIII, p. 287b）を指すものとされ、さらに一連の思索が展開されたのち、「『オネットテ』とは、1. 善良、実直、誠実という特徴を備えないようなことはしないこと ── これが重要な点だ ── 2. 自然の法が認めたり、命じたりすることであっても、もっぱら作法に基づき、礼節が定める慎み深さをもって行うことだ」（t. VIII, p. 288a）と結論づけられている。こうした解説からは、ジョクールがサロンで社交生活を送る上でのあるべき姿を浮き彫りにしようとしていることが確認される。そして「『自然法』の観点から検討した『オネットテ』については、項目『オネット』を参照のこと」（t. VIII, p. 288a）という結びの一節からは、サン＝ランベールの定義が道徳論の次元にとどまらず、政治思想と結びつくものであることが百科全書派の同志からも認められていることがわかる。

II.「過度の情念」への批判

「オネット」という資質に備わる社会的有用性を強調したのち、サン＝ランベールは同時代のモラリストたちの批判に移る。

> 今日の何人かのモラリストは的確かつ分別をもってというよりむしろ、熱狂的に過度の情念を礼賛し、こうした情念の力によってなされる偉大な事柄を大袈裟に取り上げるが、節度ある「オネット」な性格について話題にするときは、ほとんど敬意を示さず、軽蔑した態度を示すことすらある。
>
> なるほど、力強く、生き生きした情念なくしては、精神的なものであれ宗教的なものであれ狂信なくしては、偉大な行動を起こすことも偉大な才能を発揮することもできないことも、そして情念の火を消してはいけないこともわかっていた。しかし、火はあらゆるものに広がる元素であり、どこででも同じ分量であってはならないし、また同じ作用を起こしてもならない。火は保たねばならないが、火事を起こしてはならないのだ（t. VIII, p. 286b）。

1757年、7巻まで出版したところで禁書処分となった『百科全書』が1765年に刊行再開されたとき、ジャーナリスト、ピエール・ルソーはこの大事典に収録された項目の中から特に興味を惹いたものを自ら編集する定期刊行物『ジュルナル・アンシクロペディック』に紹介した。サン＝ランベールの筆に成る「オネット」も、そのような項目の一つに数えられるが――ただし、ルソーはこの無記名項目の執筆者をジョクールとみなしている――[7]、紹介文の中でルソーは「行き過ぎた情念」に関する項目執筆者の考察にやや批判的なコメントを展開している。ルソーによれば、「この考察の作者は、攻撃しつつその名を挙げていないモラリスト、行き過ぎた情念を礼賛する極端な熱狂者が誰であるかはっきり示すべきだった」[8]というのである。

18世紀が情念、そして感受性礼賛の時代であることはよく知られている。そして、ルソー自身、項目「オネット」において批判の対象となっている「今日の何人かのモラリスト」が誰であるか、ある程度検討がついていたはずだ。おそらくサン＝ランベールが念頭に置いていたのは、例えばディドロの『哲学的思索』冒頭に見出されるような以下の主張であろう。

> 理性のライバルに好意的なことを一言でも言えば、理性を非難していると思われるかもしれない。しかし、魂を偉大なものにまで高めることができるのは情念、偉大な情念しかないのだ。情念なくして、習俗においても、作品においても崇高などない。美術は揺籃期に逆戻りし、美徳は小心翼々たるものになってしまう[9]。

ここでサン＝ランベールが偉大なる情念の力に否定的な見解を示しているからといって、ディドロの人間論に真っ向から対立していたわけではない。百科全書派のこの2人の関係はむしろ良好であり、思想的に近い立場にあった。『百科全書』の無記名項目「天才« Génie »」（t. VII, pp. 582a-584a）は、実際にはサン＝ランベールによって執筆されたものであるにもかかわらず、長らくディドロによるものとみなされてきたし、サン＝ランベールの代表作『四季』に展開される感受性と快楽についての議論は、ディドロの感覚論的人間論の影響のもと構築されている[10]。さらに、『百科全書』項目「天才」には、コルネイユ、ラシーヌ、ヴォルテールの劇作品における印象的な台詞を喚起しつつ、英雄的情念に突き動かさ

れた天才的人物が、悲劇における「崇高［な場面］を生み出す」（t. VII, p. 582a）ことを強調した一節が含まれ、サン＝ランベール自身、創造行為における力強い情念の必要性を認めていることも忘れてはならないだろう。

III. 独自の政治道徳思想確立への模索

それでは、情念に対するサン＝ランベールの両義的態度はどのように説明づけられるだろうか。項目「オネット」の続きを見てみよう。

> 平和な書斎の奥から、哲学者たちは世界を燃え上がらせ、人類に不吉な熱狂を吹き込もうとしているのだ。彼らは円形劇場から剣闘士たちに極限まで戦うよう勧める古代ローマのご婦人方と同じである。なるほど、マホメットやオーディンの弟子たちは、狂信と情念の力で偉大なことを成し遂げた。しかし、ヨーロッパやアジアは、今なおこの二人のペテン師によって吹き込まれた精神と偏見に苦しんでいる（t. VIII, pp. 286b-287a）。

ここでサン＝ランベールは、マホメットやオーディンについて「狂信と情念の力」で一見偉業を成し遂げたように映るが、実際には「ペテン師」に過ぎなかったとして批判している。ところで、同様の記述は、やはりサン＝ランベールによる項目「立法者« LÉGISLATEUR »」（t. IX, pp. 357a-363a）に見出される。

> 開明された時代においては、誤りに基づいて立法することは不可能である。大臣のペテンや悪意はすぐにわかってしまい、義憤をかき立てるだけである。オーディンやマホメットの弟子たちのような破壊的狂信を広めることも難しい。今日では、ヨーロッパのいかなる国においても人間の法と自然の法に反する偏見を受け入れさせられないだろう（t. IX, p. 362b）。

サン＝ランベールは、項目「オネット」において情念そのものを否定しようと試みているのではない。むしろ、人間が情念を備える存在であることを認めた上で、それを律する必要性を説こうとしているのである。そのことは、マホメットやオーディンと対比する形で引き合いに出されるインカ帝国の初代皇帝マンコ・

カパックと中国の孔子についての記述から確認される。サン＝ランベールは、この二人を「立法者」と称し、「オネットな市民を育てた」と評しているのだが、その際、マンコ・カパックと孔子の「弟子」の間では、「秩序と祖国への愛」が彼らの「生活様式」となっており、「状況によって、積極的情念」となると語っているのである（t. IX, p. 362b）。

ピエール・ルソーはマホメットやオーディンを「ペテン師」だとする項目「オネット」の記述には一定の理解を示しつつも、「いかなる旅行者も歴史家も、500年の間に中国やペルーに登場したオネットで幸せな人の数が、世界が誕生してからそれ以外の地域に登場した人の数より多いなどと伝えたことはなかった」[11]と述べて、『百科全書』の議論に疑義を差し挟んでいる。ルソーはまた、スパルタやローマ帝国について「情念の最も偉大な力、最も偉大な活力が必要であった」（t. VIII, p. 286b）と語り、この2つの国家があたかも未熟さを残していたとみなしているかのようなサン＝ランベールの論じ方にも否定的な見解を示している。まるで「彼［＝項目「オネット」の執筆者］は古代ローマ人やスパルタ人の祖国愛がこの分類［＝極端な情念］にしているかのよう」[12]に受け取れるというのである。確かに、古くから思想家や歴史家たちにその習俗と美徳が賞賛されてきたローマ人やスパルタ人の祖国愛が、「マンコ・カパックや孔子の弟子たち」の間に見られる「秩序と祖国への愛」といかなる点で異なっていると言えるのか。

項目「オネット」において、サン＝ランベールが、インカ帝国の皇帝や中国の思想家に極端なほどに肩入れしているのは、非ヨーロッパ世界に一種のユートピアを夢見つつ、独自の政治道徳思想を構築しようとしたためではないだろうか。実際、ペルーや中国を賞賛したのち、サン＝ランベールは国家間の対立が際立つヨーロッパに目を向けるよう読者に促しつつ、「力強く激しい情念が全ての人々に共有されるようになった場合」、いかなる災厄が訪れるか想像させ、その危険性を強調している（t. VIII, p. 287a）。そして、「（情念を礼賛する）モラリストたちがある国家に掻き立てるべき情念について検討していたとするなら」という仮定を示しつつ、「全体に対して、立法者がそのような注意を払っていることを確認すべきだっただろう」と述べ、情念の動きを法のもとに従える必要性を主張するのである（t. VIII, p. 287a）。さらに、サン＝ランベールは実在する具体的な国家や地域についての考察からより一般的な議論へと発展させ、君主制と共和

制── 彼は迂言的な方法で、この2つの政体だけが開明された人類が受け入れることのできるものだとしている ── においては、「国家が必要な情念が保持される」（t. VIII, p. 287a）とも指摘している。また、「従うべき立場の人々は、支配すべき立場の人々と同じくらい力強く、生き生きした情念を有してはならない」（t. VIII, p. 287a）という一節からは、サン＝ランベールが全面的に情念の力を否定しているのではないことが確認される。良識と類稀なる才能を備えた立法者はいったん脇に置くとして、彼がここで伝えようとするのは、国家の維持に当たって市民が「法に適合した穏やかな情念」（t. VIII, p. 287b）を持つことの重要性である。「オネットな心の持ち主は、秩序と美徳を尊重し、いかなる時も自らの傾向、好み、利益に打ち勝つべき」（t. VIII, p. 287b）なのである。

興味深いのは、サン＝ランベールが、「オネット」あるいは「オネットテ」という17世紀のサロンで理想とされた社交人のあり方を、政治的議論の中に組み込んで、その社会的有用性について独自の解釈を展開していることであろう。ここで思い出されるのが、やはりサン＝ランベールの執筆項目である「作法« MANIÈRE »」（t. X, pp. 34b-36b）に展開される「作法」の社会的有用性についての議論である。この項目において、サン＝ランベールは個々人に「作法」を守らせることが、社会における義務を遂行しようという道徳的感情に目覚めさせるきっかけとなり、社会における良き習俗の維持につながると主張しているのである[13]。「作法」と「法」は不可分であるというサン＝ランベールの主張は、作法と法を截然と分け隔てようとするモンテスキューの議論に対する反論となっている[14]。その後の政治思想の発展を考えれば、モンテスキューの議論の方が妥当なものであることは明らかである。しかし『百科全書』に挿入されたサン＝ランベールの執筆項目からは、近代的な法の概念が確立されていない時代にあって、彼が政治思想と道徳論を連結させた上で、いかに独自の政治道徳思想を展開できるか模索し続けたその軌跡が垣間見られるのである。

***

ルッカ版『百科全書』（1758-1776）は、オリジナルバージョンの『百科全書』に織り込まれる反宗教的思想が刊行当時カトリックの立場からどのように受け止められていたか知る上で貴重な資料である[15]。編者はカトリックの教えに抵触す

る危険な主張が含まれる項目に脚注を加え、批判を展開しているのである。項目「オネット」についても、編者は脚注の中で、「真のキリスト教徒となりなさい。自らの力を買いかぶってはなりません。善をなし、徳を実践するためには力不足であることを知りなさい。（中略）徳高く、幸福になるには、知性、能力、善性において無限の存在 ── あなたを強くし、導き、照らし出す存在 ── の力と恩寵と光明が必要なのです」[16]と述べ、世俗的、人間主義的観点に立つサン＝ランベールの道徳論に異を唱えている。しかし、項目「オネット」をはじめとする『百科全書』の道徳関連項目には、のちの『普遍的カテキスム』や『社会についての歴史的考察』といった思想的著作へとつながっていく議論の萌芽が確かに認められる。

今日のフランス文学史あるいは思想史において、サン＝ランベールの功績はあまり大きく取り上げられないかもしれない。しかし、同時代の読者から絶大な指示を得、アカデミー・フランセーズの会員に名を連ねたサン＝ランベールの思索に目を向けることは、近代政治思想の礎が築かれた18世紀半ばにおける思想家たちの関心事 ── 大作家の主著からだけではすくい取れない関心事 ── を捉え直すことを可能にしてくれるだろう。

（付記）本研究はJSPS科研費17K02601および20K00478の助成を受けたものです。

註

1　サン＝ランベールによる『百科全書』の執筆項目同定については、F.ムローの以下の論考に詳しい。François Moureau, « Le manuscrit de l'article ‹ Luxe › ou l'atelier de Saint-Lambert », *Recherche sur Diderot et l'*Encyclopédie, nº 1, 1986, pp. 71-84. なお、無記名項目の執筆者同定については、『百科全書』研究における残された課題の一つである。

2　「オネットム」の概念については、おもに以下の論考を参照した。Jean-Pierre Dens, *L'Honnête Homme et la critique du goût. Esthétique et société au XVII*e *siècle*, French Forum Publishers, 1981 ; Giovanni Dotoli, *L'Honnête Homme. Une Philosophie du pouvoir*, L'Harmattan, 2019.

3　『百科全書』を辞書史の中に位置付けて再読する意義については、以下の論考に詳しい。Marie Leca-Tsiomis, *Écrire l'*Encyclopédie. *Diderot : de l'usage des dictionnaires à*

la grammaire philosophique, *SVEC* 375, The Voltaire Foundation, 1999.

4 *Dictionnaire universel français et latin*, t. III, 1721, p. 672.

5 *Dictionnaire de l'Académie française*, t. I, 1740, p. 813.

6 G. ドトリの論考にも、『百科全書』当該項目は「オネットテ」という語の典型的な定義を示すものとして引用されている（前掲書、pp. 30-31）。

7 *Journal encyclopédique*, janvier 1767, tome I, Ière Partie, pp. 3-9.

8 *Ibid*., pp. 5-6.

9 Diderot, *Pensées philosophiques*, La Haye, 1746, p. 3.

10 この点については、以下の拙稿を参照のこと。Saint-Lambert, *Les Saisons*. *Poème*, texte établi et annoté par Sakurako Inoué, STFM, 2014, « Introduction », pp. 22-27.

11 *Journal Encyclopédique*, janvier 1767, tome I, Ier Partie, pp. 6-7.

12 *Journal Encyclopédique*, janvier 1767, tome I, Ier Partie, p. 6.

13 以下の拙稿を参照のこと。井上櫻子「サン＝ランベールと『百科全書』―項目「作法« MANIÈRE »をめぐって―」『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』、第67号、2018年10月、pp. 19-32。

14 Montesquieu, *De l'Esprit des lois*, édition de Robert Derathé, Garnier, 1973, livre XIX, chap. 16 « Comment quelques législateurs ont confondu les principes qui gouvernent les hommes ? », t. I, p. 337.

15 トスカーナ版『百科全書』については、以下の解説を参照した。Marie Leca-Tsiomis, « Les rééditions toscanes de l'*Encyclopédie* », *Suites et métamorphoses au XVIIIe siècle*, Édition Numérique Collaborative et CRitique de l'*Encyclopédie*, http://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedie/documentation/?s=167&.

16 Note de l'article « HONNÊTE », *Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* (édition de Lucques), t. VIII, 1766, p. 237.